

Sesshu 雪舟没後500年 Master of Ink and Brush: 500th Anniversary

先月号で、雪舟は宝福寺ではなく直接相国寺（京都市）に入寺したと書きましたが、雪舟は禅の修行に際し、在世時の史料どおりに当初から相国寺へ赴いたのでしょうか。相国寺は京都五山の一つで、日本最上位の禅寺でした。しかし、彼の禅林における交友関係を尋ねてみると、相国寺との関わりが乏しい反面、人数の面でも親密度でも東福寺系の僧との接触が際立っています。つまり、現象面では相国寺ではなく、東福寺入寺説が主張される方が自然で納得できるほどののです。

宝福寺から京都相国寺へ

次に、江戸期の文献から登場した宝福寺との関わりですが、備中赤浜で生まれた男児が禅僧になろうとするならば、まず地元で最も格式が高く、隆盛を極めていた宝福寺に想像が及ぶのが当然です。また、江戸期に何の検証作業も試みぬまま、虚構が語られたわけではないでしょう。おそらくそうした言い伝えがあったのです。とはいえ、この連載の④（7月号掲載）で詳述したように、雪舟が誕生したころの赤浜には、雪舟の一族と考えられる藤（原）氏が外護す

る徳本庵という仏通寺派の禅庵が存在し、彼はこの徳本庵を通じて禅道に進んでいったと理解されるのです。すると、意外なことに、ここでも東福寺派の有力地方寺院である宝福寺の名前が浮上する余地が生まれます。五山を離れ林下の禅に徹し、門弟に五山への出頭を禁じた仏通寺派の祖愚中周及ですが、東福寺栗棘派とだけはかなり密接な関係を維持し、交友を深めていました。この愚中の高弟で、

徳本庵や藤氏一族との親密な関係が判明している重玄寺の千畝周竹和尚も同様です。雪舟周辺においては、藤氏、徳本庵、千畝、重玄寺、仏通寺、東福寺、さらに宝福寺という大きな環が形成されていたのではないのでしょうか。それ故、幼年、もしくは少年の雪舟が宝福寺に入ることに関して周囲に抵抗感はなかったように思えます。そこで筆者は、雪舟は宝福寺を経て東福寺に入り、その後、水墨画の修業のために自ら求め、あるいは何らかの縁にしたがい相国寺に移ったと考えています。



相国寺（京都市上京区）

文／岡山県立美術館学芸課長 守安 敬

お知らせ 14~20p
ボイス 21p
人権 22p

【輝いている人】 9p

藤井香奈恵さん・岡田真澄さん

【まちの話題】 12p

雪舟さんってどんな人 雪舟フェスタ 茅原英さん満100歳

【市政トピックス】 6~8p

「台風への備え」と「自主防災活動に補助」 農地の情報提供を
総社でPGAシニアツアー最終戦 吉備路再発見講演会

【地産地食】 23p

ベニズイキ

特集◎子育て支援 2p

地域に根ざした子育て支援へ

●シリーズ● 10p

「やっぱりええなあ。総社のまち」「介護保険」「健康アドバイス」「市長室から」